

# 事態把握のパターンと表現の対応関係

嶋 村 誠

## I. はじめに

わが国の学習英文法において、基本的な構文を説明するには有用だとして、動詞が主語以外にどんな文の要素（具体的には目的語と補語）を必要とするか否かという基準に従って、すべての文を5つの型に分けるいわゆる5文型と呼ばれる分類方法が長年にわたって用いられている。このように5文型は、「主語」や「目的語」などという文法関係に焦点を当てたものであり、そのルーツはOnions（1971, § 5, 同書の初版は1904）だそうである。もちろん全ての英文がわずか5つの文型で説明しきれものではないが、そのことが理解できる程度にまで学習を進めるうえでは便利だというわけで今日に至っているというのが実状であろう。

本稿では、この5文型でも用いられている「主語」と「目的語」に焦点を当て、特に第3文型と第1文型と呼ばれる構文がどのような事態認知を経て用いられるのかを探るために、事態把握のパターンと表現の対応関係について英語と日本語を資料としながら考察したい。

## II. 文法関係

学習英文法における5文型とは(1)の各構文のことである。

- (1) a. 第1文型 主語+動詞 (S+V)
- b. 第2文型 主語+動詞+補語 (S+V+C)
- c. 第3文型 主語+動詞+目的語 (S+V+O)
- d. 第4文型 主語+動詞+間接目的語+直接目的語 (S+V+O+O)
- e. 第5文型 主語+動詞+目的語+補語 (S+V+O+C)

これらは可能な限り文中から削除できるものをすべて削除した後に残った要素がどんな働きをするものかを基準にして分類した結果である。すなわちこれ以上要素を削除すると非文となるという、ある意味で臨界状態にいたるまで要素を削除した後のものをもとにして

分類したものである。このような分類をするとき、動詞は英語の構文では最も大切な要素であるとの認識から、これら5文型に用いられている動詞のうち、第1、第2文型のように、目的語をとらない動詞を自動詞と呼び、第3-5文型のように目的語をとる動詞を他動詞と呼んで、動詞を大きく2つに区別することができると考えられてきた。

(1)で確認した5文型の中で用いられている「主語」や「目的語」という文法関係は何を基準にして規定されているのであろうか。伝統的な文法理論においては、いま見たように目的語の有無を基準にして動詞を他動詞と自動詞に機械的に大別するという考えがとられ、「主語」も「目的語」も純粹に統語的概念であって、これらを意味的に定義づけることはできないと考えられてきた。確かに、次の(2)の各文の主語がもっている意味役割を考えてみると、

- (2) a. Floyd broke the glass (with the hammer).  
 b. The hammer (easily) broke the glass.  
 c. The glass (easily) broke.

(Langacker, 1990, p. 216)

主語という点では同じであっても、(2a)のように主語の意味役割が動作主 (Agent) であったり、(2b)の場合のように道具 (Instrument) であったり、(2c)のように被動作主 (Patient) であったりと、まちまちであり、文法関係としての「主語」に共通する意味的特徴を一意的に抽出することはとてもできそうにない。

ところで認知文法では、文法的な知識も、語彙の知識と同様に、意味と不可分な関係にある要素から成り立っている一種の記号体系であると考えられており、このことはすぐれて文法的な知識である「主語」「目的語」についても例外ではないはずである。認知文法における「意味」とは、発話者の事態把握 (construal)、すなわち発話者が事態をどのように見ているか (捉えているか、解釈しているか) といった主観的な側面を含んだものである。それゆえ、意味とはすなわち意味役割のことである (言い換えると、意味役割だけが意味の中身である) と考えるのでなければ、以下で見るように、プロトタイプとスキーマという発話者の事態把握のしかたにみられる特性をカテゴリーの特徴づけに取り入れることによって、「主語」「目的語」といった文法関係のカテゴリーも意味的に定義することは可能である。

### Ⅲ. 他動性の階層

一般には、現実世界に存在する、記号外のある存在物 (entity) がある対象にむけて行った能動的な行為や事態を言い表す場合には他動詞構文が用いられ、一方、そうした存

在物の状態または自律的な変化を言い表す場合には自動詞構文が用いられる傾向がある。しかし、どのような構文が用いられるのかということをつまみよとする場合、先にみたように統語的概念としての「目的語」をとる他動詞を用いた他動詞文と、目的語をとらない自動詞を用いた自動詞文という、古典的カテゴリーに基づく2分法による形式的な分類をしたのでは、言語使用者による文理解の現実を十分に捉えきることができないと思われる。実際に用いられている文を観察すると、形式的には他動詞構文のかたちをとっていても必ずしも能動的な行為について言い表しているわけではない場合もある。また逆に、形式的には自動詞構文のかたちをとっていても、必ずしも自律的な変化を言い表しているわけではない文もみられる。

そこで、構文の種類をどのようにみるべきかという問題を解決する糸口を得るために、「動作から受ける影響の程度」という概念を基準にすることができないかどうか考えてみよう。この動作から受ける影響の程度という概念は、Hopper and Thompson (1980, p.252) にみられる「他動性の階層」(transitivity) という考え方と連動しているのではないかと考えられる。<sup>1)</sup> また、このふたりは Givón (1979) が語についてプロトタイプということを考えているらしいことにヒントを得てそれを発展して他動性の階層という考え方にたどり着いたと思われる。Hopper and Thompson (1980) は、他動性を規定する要因として次の10個の特性を認定し、それぞれの項目を他動性の高い程度 (HIGH) から低い程度 (LOW) まで階層をなしているパラメータと考えている。

(3)	HIGH	LOW
A. Participants	2 or more participants, A and O. <sup>2)</sup>	1 participant
B. Kinesis	action	non-action
C. Aspect	telic	atelic
D. Punctuality	punctual	non-punctual
E. Volitionality	volitional	non-volitional
F. Affirmation	affirmative	negative
G. Mode	realis	irrealis
H. Agency	A high in potency	A low in potency
I. Affectedness of O	O totally affected	O not affected
J. Individuation of O	O highly individuated	O non-individuated

1) 他動性については、Hopper and Thompson (1980) のほか、山梨 (1995)、角田 (1991; 2005)、Jacobsen (1992)、Givón (1995)、山本 (2002)、中村 (2004) など参照。

2) 略号により、A は Agent を、O は Object を示す。

(3)の表が示すところによれば、AからJまでの各項目において、HIGHに該当するならばその項目について他動性が高いということであり、LOWに該当するならば他動性が低いということである。例えば、Aの「参与者」の項目について言うならば、参与者の数が1人よりも複数の方が他動性が高いことになる。なお、その場合、複数の参与者は「動作主」と「対象」であるということを示している。Bの「動性」については、非動作よりも動作の方が他動性が高いことを示している。以下順に、Cの「アスペクト」については、非完了よりも完了の方が、Dの「瞬時性」では非瞬時よりも瞬時の方が、Eの「意図性」では非意図的よりも意図的の方が、Fの「肯定性」では否定よりも肯定の方が、Gの「ムード」では非現実よりも現実の方が、Hの「動作主性」では能力が低いものより高いものの方が、Iの「対象の影響」では対象に影響がないよりも影響がある方が、またJの「対象の個別性」では対象が個別化されていないよりも個別化されている方が、それぞれ他動性の度合いが高いということである。さらにAからJまでのパラメータを総計して、高い程度のものの数が多ければ多いほど他動性が高いということになる。このように、Hopper and Thompson (1980) が提出しているパラメータは、他動性がプロトタイプ効果を示すものであるという考えを基盤にしており、古典的カテゴリーによって他動詞構文と自動詞構文の2つに大別するのは考え方が根本的に異なっている。なお、(3)の各パラメータについては、意図性と動作主性等に重複がみられる(山梨 1995, p.236)、また意図性とコントロールとを区別する必要がある(角田 2005, p.56)等、様々な指摘や提案もされている。しかし、他動性を捉えるためにこれらのパラメータでは不足しているというわけではなく、また、パラメータを定めることが本稿の直接の目的ではないため、本稿ではこのままの形で参考にしても支障はないと思われる。

#### IV. 他動詞構文と自動詞構文のプロトタイプ

前節でみたように、Hopper and Thompson (1980) は、他動性がプロトタイプ効果を示すものであるという考えを基盤にして、他動性の高低の要因となるパラメータを認定したものであった。ただし、「動作から受ける影響の程度」は論じられていたが、動作主からの影響が及んでいく被動作主の性質については明示されていない。そこで認知文法における議論を参考にしながら、他動詞構文のプロトタイプ、および他動詞構文の主語と目的語のプロトタイプについて整理しておこう。<sup>3)</sup>

3) 他動詞構文のプロトタイプについては、特に Langacker (1990, pp.211-224; 1991, pp.304-329; 2000, pp.27-34)、谷口 (2005, pp.35-39)、山梨 (1995, pp.236-239; 2009, pp.56-59)、Taylor (2003, pp.231-235) を参照。

(4) A. 他動詞構文のプロトタイプ

1. 動作主から被動作主へのエネルギーの移動
2. 2つの参与者間に非対称的な関係が認められる

B. 他動詞構文の主語のプロトタイプ

プロファイルされた非対称的關係の経路の先頭に位置する、最も際立つ動作主としての参与者

C. 他動詞構文の目的語のプロトタイプ

プロファイルされた非対称的關係の経路において末尾に位置する、主語の次に際立つ被動作主としての参与者

次節では、(3)の他動性のパラメータと(4)の他動詞構文のプロトタイプという概念をはじめ、認知文法上の概念を念頭に置きながら、いわゆる英語の第1文型と第3文型に該当する文が生まれる場合の事態認知について考察することにする。

## V. 第1文型 (S+V) と 第3文型 (S+V+O)

第3文型は、典型的には動作主を主語にもち、被動作主を目的語にもつ動詞が使われている文であり、(4)が示すように、参与者が2つ存在する他動詞構文のプロトタイプと言えるものである。一方、第1文型は、基本的には動作主を主語にもつ動詞が使われている文であり、参与者が1つ存在する自動詞構文のプロトタイプと言えるものである。

一般に、われわれが身の回りの外界で生じる事態を把握する時、その状況に応じていろいろな認知のしかたをしていると考えられる。事態把握によってどのように概念化し、それを言語によって表現しているのだろうか。

認知文法では事態把握のしかたが言語表現にも反映しているはずであると考えられている。そうした事態把握を反映する認知モデルの代表例であり、他動性に関係があると考えられるものとして、Langacker (1990, 1991, 1999) のビリヤードボール・モデル (billiard-ball model) が挙げられる。このモデルは、われわれが外界で起こる事態に関わる存在物をまるでビリヤードのボールのような物体と同様にみなしているところからこの名で呼ばれている。そこで、ビリヤードにおけるボールの動きを考えてみると、1個のボールが外からのエネルギーを与えられて移動し、別のボールに衝突することによってそのボールにエネルギーを伝達し、さらにエネルギーを伝達されたボールはそれによって移動を始め、という具合に、次から次へと衝突を繰り返し、その都度エネルギーの伝達を行いながらボールの運動が連鎖的に行われる。ビリヤードボール・モデルによれば、われわれは、認知パターンのひとつとして、外界の存在物をこのボールのようなものとして把握しているというのである。



の事態認知の様子が(6a)に図示されているように、行為の動作主である Floyd、道具の hammer、行為の影響を受ける被動作主の glass がいずれもプロファイルされ、認知のスコープに入っている。また、動作主から道具へのエネルギーの移動も、さらに道具から被動作主へのエネルギーの移動もプロファイルされ、認知スコープに入っている。そして、右端の被動作主がエネルギーの移動による影響を受けて状態変化したこともプロファイルされて認知スコープに入っている。このように、Floyd が hammer で glass を割った行為について、(6a)に図示されているように、行為の動作主である Floyd から hammer にエネルギーが伝達され、そのエネルギーがさらに glass に伝わり、その結果、影響を受けた glass が割れるという状態変化が起こったのだという事態把握が行われたとき、そのことの反映として表現(5a)が用いられているということが示されている。このように、(5a)の文は、(4)の各項に該当し、他動詞構文のプロトタイプと言えるものである。

次に(5b)と(5c)を見てみよう。(5a)と同じ行為であっても、(5b)の場合は、(6b)に図示されているように、hammer から右の部分、すなわち hammer 自体と、hammer から glass へのエネルギー移動、および glass とその状態変化だけがプロファイルされて認知スコープに入っており、動作主の Floyd や Floyd から hammer へのエネルギー移動はスコープに入っていない。また、(5c)の場合には、(6c)に図示されているように、被動作主の glass とその状態変化だけがプロファイルされており、それ以外、すなわち、Floyd と hammer、およびエネルギー移動についてはスコープの外にある。

このように、外界の同一の事態に対しても把握のしかたはさまざまであり、それぞれの異なる把握のしかたを反映するかたちで別々の表現が用いられているということがこれらの例文や図からも強く示唆される。認知文法では、ことばと外界の存在物との対応関係に意味を還元しようとするいわゆる客観主義的意味論観はとらず、人間がことばによって外界の存在物に対して意味づけ (sense-making) する作用が本質的に重要な働きをしているとして意味を考える。つまり、たとえ客観的には同一の事態であっても、それを描写する表現が異なるのは異なる概念化を伴っているからであり、意味とは概念化そのもののことであると考えるので、表現が異なれば意味も異なるということになる。ここに「記号体系としての文法 (the symbolic nature of grammar)」<sup>4)</sup>という見方をする文法観が伺える。

## VI. 事態把握のパターンと表現の対応関係

(5a)-(5c)の文における事態把握に関連して、(7a)-(7c)のような文を取り上げてみよう。

4) この点については、Langacker (1987, pp.81-86 ; 1990, pp.105-108 ; 2008, pp.14-26) など参照。



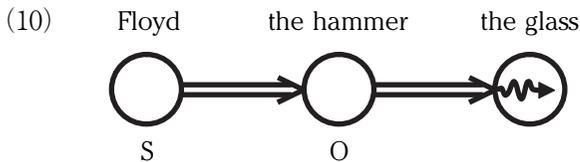
いるのに対して、(7c)は行為連鎖の最初の部分だけしかプロファイルされていない。(4C)で規定したように、プロファイルされている部分の末尾の参加者が目的語になるため、(7a)では glass が、(7c)では hammer が目的語の役割を担うという違いが生じるわけである。

上記のように、動詞 hit には目的語のとりかたによって(7a)と(7c)の2通りの構文が存在するが、ここで、(7a)の with the hammer にはかっこがつけられているけれども、(7c)の against the glass にはかっこがつけられていないことに注目したい。

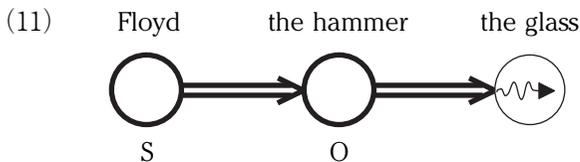
ところで、手を振り下ろす行為をするとき、それをぶつける対象が何もなく、ただ手を振り下ろして空を切る、いわば空振りをする行為については、hit を用いて(9)のように表すことはできない。

(9) \*Floyd hit his hand. <sup>6)</sup>

ということは、(7c)の文が発せられる時の事態把握を図示すると、Langacker (1990, p.217) による分析(8c)のようにではなく、(10)のように被動作主もプロファイルされて捉えられているはずであると思えるかもしれない。



ちなみに、山梨 (2009, p.69) は、(7c)の事態把握が図(11)のように規定されているが、その理由についての説明はなされていない。



一方、(7c)と同じ行為を見て、たとえば(12)のように言うことは可能であり、その場合の事態把握こそが(8c)で図示されるべきであると思えるかもしれない。

6) (9)の\*印はその文が非文であることを示す。もちろん、何かで手をたたいたという意味であれば(9)も正文であるが、その意味で用いられる場合には、(7a)と同じ構文であり、もはや(7c)とは異なる種類の構文と考えられる。

(12) Floyd hit the hammer, (not the stick).

しかし、これらに関連する事態として、さらに(13)のような文を挙げることができる。

(13) ALVY: (*Hitting his hand on the counter*) (Allen 1997, p. 18)

これは、主人公 Alvy が映画館の入り口で見たしぐさを示すト書きである。Alvy は、映画を初めから終わりまで観る主義であるにもかかわらず、映画館の入り口で、すでに2分前に上映が始まっていると告げられる。そこで、「これじゃダメだ、入るのはよす」と言いながら手でカウンターをたたいた場面である。それゆえ、Alvy が行った行為の目的はテーブルをたたいて、その結果としてテーブルに何らかの影響を与える（その場合には、“Hitting the counter with his hand” と表現する方が適切であろう）ことにあるのではなく、自分の手を何かに打ちつけることによって自分の苛立ちの気持ちを表すことにあり、そのためにこの構文が選ばれていると考えられる。それゆえ、この事態の中で、his hand は他のものに置き換え難いであろうが、counter の部分は他の表現に置き換わってもこのト書きの趣旨にそれほど大きな変化はないものと思われる。(13)の場合にはそれがたまたまカウンターであったというにすぎない。

動詞 hit だけでなく、たとえば、(14)の文に用いられている動詞 strike についても同様のことが言える。<sup>7)</sup>

(14) He struck his fist on the table. (BNC)

これは、発言の時に、「その点については絶対にそうだ、自信をもってそう言える」と言いながら(14)が示すように拳でテーブルを叩き、それに続いて「おれはやる！」と強い意思を表明している場面である。

このほか、いくつか例を挙げておこう。

(15) a. She beats her fist on the bed. (Allen 1997, p. 117)

b. He continues to swat the racquet all over the bathroom. . . . (Allen 1997, p. 116)

(13)-(15)のような構文に共通な点は、動作主が自分の何らかの感情をあらわにするために何かを叩こうとする行為であるということである。こうしたことを考慮にいと、(7c)の事態把握の様子は(11)のように図示されるべきであろうと考えられる。

ところで、巻下 (1984, pp.20-22) や嶋村 (2003, pp.87-91) に指摘されているよう

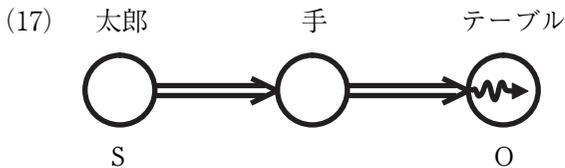
7) この構文についてさらに詳しくは、嶋村 (2003) を参照されたい。

に、一部の動詞について言えることであるが、日本語母語話者にとって、同一の動詞が2通りの目的語のとりかたをしようという英語動詞の柔軟性に対する意外性が感じられるとともに、それら2通りのうちの一方の表現だけに対して意外感が伴うことが興味深い。上記 hit と strike について言えば、(7a)のタイプの文に対しては意外感を伴わないが、(7c)、(12)、(13)、(14)、(15)のタイプに初めて接した時には意外感が伴うのはなぜであろうか。

そこで、動詞 hit に関連して、日本語の動詞「たたく」をみてみよう。

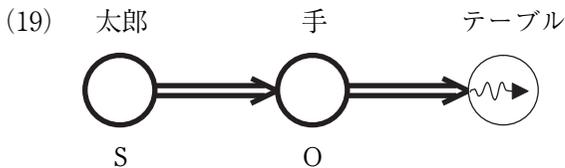
- (16) a. 太郎は手でテーブルをたたいた。  
 b. \*太郎は手をテーブルでたたいた。

「たたく」の場合、(7a)タイプに対応する構文を用いた(16a)は正文であり、この文の事態認知は、図(17)のように規定されると考えられる。ところが、(7c)、(12)、(13)、(14)、(15)のタイプに対応する構文を用いようとする、(16b)のように非文になってしまう。



一方、英語において意外感が伴っていた (7c)、(12)、(13)、(14)、(15)のタイプの構文が日本語に全く無いわけではない。例えば、(18a)のような文が一例として挙げられ、この文の事態認知は、図(19)のように規定されると考えられる。ところが、(7a)のタイプに対応する構文を用いようとする、(18b)のように非文になってしまう。

- (18) a. 太郎は手をテーブルにたたきつけた。  
 b. \*太郎は手でテーブルをたたきつけた。



そこで、本稿で取り上げたような2種類の目的語をとる動詞について、日本語の(16)(17)のタイプの文と(18)(19)のタイプの文の関係を総合したうえで、英語の(7a)(8a)のタ

イプの文と (7c) (8c) のタイプの文の場合を比較対照すると、次のようなことが言えそうである。すなわち、英語の一部の動詞においては、(8a) と (8c) のように、同一の動詞が同一の動作主を主語として、異なる意味役割の参加者を目的語とする 2 種類の異なる事態把握のしかたを可能にしよう。一方、日本語の場合には、(17) (すなわち (8a) と同種) と (19) のような異なる事態把握にはそれぞれ別々の動詞が用いられ、英語のように同一の動詞が両方に用いられるような一人二役の動詞が見当たらない。そのために、先に触れたように、同一の動詞が 2 通りの目的語のとりかたをしようという英語動詞の柔軟性に対しても意外性が感じられるとともに、それら 2 通りのうちの一方の表現だけに対して意外感が伴うのは、母語の干渉によるのであって、日本語の動詞には 2 通りのうちのどちらか一方の用い方しか備わっていないために、その動詞が別のタイプの目的語のとりかたをしているときには意外性を感じてしまうと考えられる。

## Ⅶ. まとめ

われわれが日常行っている事態認知とそれを言い表す表現とは連動していると考えられる。そこで、その事態認知のパターンと、表現における「主語」「目的語」という文法関係との関係について理解するための一助として、他動詞構文に焦点をあてて考察した。まず Hopper and Thompson (1980) による「他動性の階層」という考え方を手懸かりに、他動詞構文のプロトタイプを規定した。そのうえで、ビリヤードボール・モデルに基づいて図示できる事態をいくつかとりあげて、その事態把握にみられる特性と、それが学習英文法でいう第 1 文型と第 3 文型で表現される場合の連動のしくみについて考察した。また、一部の動詞については、同一の動詞が 2 通りの目的語のとりかたをしようという英語動詞の柔軟性に対して日本語母語話者には意外性を感じるとともに、それら 2 通りのうちの一方の表現だけに対して意外感が伴うのはなぜなのか、ということについて解明することを試みた。

## 参考文献

- Allen, W. (1997). *Annie Hall*. Revised ed. Tokyo: Shohakusha.
- Croft, W. (1991). *Syntactic categories and grammatical relations: The cognitive organization of information*. Chicago: University of Chicago Press.
- Croft, W. (1994). Voice: Beyond control and affectedness. In B. Fox & P. Hopper (Eds.), *Voice: Form and function* (pp. 89–118). Amsterdam: John Benjamins.
- Croft, W., & Cruse, D. A. (2004). *Cognitive linguistics*. Cambridge: Cambridge University Press.
- DeLancey, S. (1990). Ergativity and the cognitive model of event structure in Lhasa Tibetan. *Cognitive Linguistics* 1 (3), 289–321.
- Fillmore, C. J. (1970). The grammar of *hitting* and *breaking*. In R. A. Jacobs & P. S. Rosenbaum (Eds.),

- Readings in English transformational grammar* (pp. 120–133). Waltham, MA: Ginn.
- Fox, B. A. (1995). The category “S” in English conversation. In W. Abraham, T. Givón & S. A. Thompson (Eds.), *Discourse grammar and typology* (pp. 153–178). Amsterdam: John Benjamins.
- Givón, T. (1979). *On understanding grammar*. New York: Academic Press.
- Givón, T. (1995). *Functionalism and grammar*. Amsterdam: John Benjamins.
- Hopper, P. J., & Thompson, S. A. (1980). Transitivity in grammar and discourse. *Language* 56, 251–299.
- Hopper, P. J., & Thompson, S. A. (Eds.). (1982). *Studies in transitivity*. (Syntax and Semantics, Vol. 15). New York: Academic Press.
- Jacobsen (ヤコブセン), W. M. (1989). 他動性とプロトタイプ論. 久野暲・柴谷方良 (編). 『日本語学の新展開』 (pp. 213–248). 東京：くろしお出版.
- Jacobsen, W. M. (1992). *The transitive structure of events in Japanese*. Tokyo: Kurocio.
- Lakoff, G. (1977). Linguistic gestalts. *CLS* 8, 183–228.
- Lakoff, G. (1987). *Women, fire, and dangerous things*. Chicago: University of Chicago Press. (池上嘉彦・河上誓作他 (訳). (1992). 『認知意味論—言語から見た人間の心—』 東京：紀伊國屋書店.)
- Lakoff, G., & Johnson, M. (1980). *Metaphors we live by*. Chicago: University of Chicago Press. (渡部昇一・楠瀬淳三・下谷和幸 (訳). (1986). 『レトリックと人生』 東京：大修館書店.)
- Lakoff, G., & Johnson, M. (1999). *Philosophy in the flesh*. New York: Basic Books.
- Langacker, R. W. (1987). *Foundations of cognitive grammar: Vol. 1, Theoretical prerequisites*. Stanford: Stanford University Press.
- Langacker, R. W. (1988). A view of linguistic semantics. In B. Rudzka-Ostyn (Ed.), *Topics in Cognitive Linguistics* (pp. 49–90). Amsterdam: John Benjamins.
- Langacker, R. W. (1990). *Concept, image, and symbol*. Berlin: Walter de Gruyter.
- Langacker, R. W. (1991). *Foundations of cognitive grammar: Vol. 2, Descriptive application*. Stanford: Stanford University Press.
- Langacker, R. W. (2000). *Grammar and conceptualization*. Berlin: Walter de Gruyter.
- Langacker, R. W. (2008). *Cognitive grammar: A basic introduction*. New York: Oxford University Press.
- 巻下吉夫. (1984). 『日本語から見た英語表現—英語述語の意味的考察を中心として—』 東京：研究社出版.
- 中村 渉. (2004). 他動性と構文—プロトタイプ, 拡張, スキーマ. 中村芳久 (編). 『認知文法論』 (pp. 169–204). 東京：大修館書店.
- Onions, C. T. (Revised by H. D. H. Miller). (1971). *Modern English syntax*. London: Routledge & Kegan Paul. (初版は、1904).
- 嶋村 誠. (2003). 英語における2通りの補語. 『商学論究』 50(4), 77–91.
- Talmy, L. (1978). Figure and ground in complex sentences. In J. H. Greenberg (Ed.), *Universals of human language: Vol. 4, Syntax* (pp. 625–629). Stanford: Stanford University Press.
- Talmy, L. (2000). *Toward a cognitive semantics: Vol. 1, Concept structuring systems*. Cambridge, MA: MIT Press.
- 谷口一美. (2005). 『事態概念の記号化に関する認知言語学的研究』 東京：ひつじ書房.
- Taylor, (2002). *Cognitive grammar*. Oxford: Oxford University Press.
- Taylor, (2003). *Linguistic categorization* (2nd ed.). Oxford: Clarendon Press.
- Tsunoda, T. (1985). Remarks on transitivity. *Journal of Linguistics* 21, 385–396.
- 角田大作. (1991). 『世界の言語と日本語』 東京：くろしお出版.

- 角田太作. (2005). 他動性の研究の歴史と今後の期待. 『言語』 34 (8), 51-57.
- 山梨正明. (1995). 『認知文法論』 東京：ひつじ書房.
- 山梨正明. (2009). 『認知構文論—文法のゲシュタルト性—』 東京：大修館書店.
- 山本英一. (2002). 『「順序づけ」と「なぞり」の意味論・語用論』 大阪：関西大学出版部.

#### コーパス

BNC: The British National Corpus. Shogakukan Corpus Network を経由して利用。

# On the Correspondence Between Our Construal Patterns and Their Expressions

Makoto SHIMAMURA

This study is based on the understanding that the patterns found in the way we construe events and the expressions we use to express them are closely linked together. So conceived, we attempted to clarify the patterns and their relationship with the choice of grammatical relations like subject and object of the sentences we use to express our construal process. Using as a clue what Hopper and Thompson (1980) took to be transitivity, we set about our study first by stipulating the prototype of transitive sentences, and the schemata of their subject and object. We then took up some events whose construal process could be illustrated by what is called the “billiard-ball model,” and discussed the properties of the process of our construal of those events and their relationship with the choice of subject and object of the sentences used to express them. We paid special attention to the fact that the native speakers of Japanese find it hard to imagine how some of English verbs have two different ways of taking objects, and one of them comes as a complete surprise to them. We lastly attempted to find why they feel that way.